

「情報記号論」講義

総括と展望

A Course in Information Semiotics: Synthesis and Perspective

石田 英敬*

Hidetaka Ishida

[...] 社会のなかにおける記号の生活を研究するようなひとつの学を考察してみることができる；
[...]；われわれはこれを記号学（Sémiologie。ギリシャ語の *semêion* 「記号」から）と呼ぼうとおもう。それは記号がなにかから成り立ち、どんな法則がそれらを支配するかを教えるであろう。

それはまだ存在しないのであるから、どんなものになるかはわからない；
しかしそれは存在すべき権利を有し、その位置はあらかじめ決定されている。

フェルディナン・ド・ソシュール『一般言語学講義』¹

0 はじめに

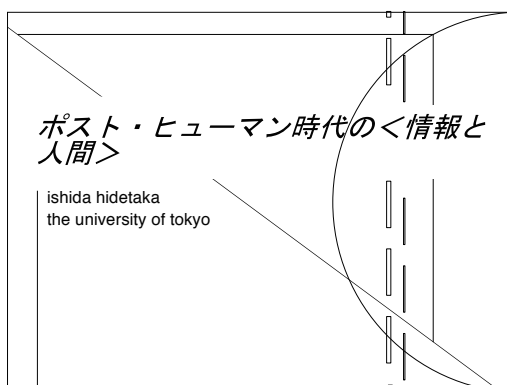


図 1. 「情報学環設立準備シンポジウム」
スライド 2000 年 3 月

2019 年 3 月末をもって東京大学を退任するにあたり、大学院学際情報学府で 2000 年以来 19 年間続けてきた講義「情報記号論」の総括を記しておこうと思う。

2000 年の情報学環・学際情報学府の発足を前に行われた同年 3 月の設立準備シンポジウムでは「ポスト・ヒューマン時代の〈情報と人間〉」の題で短い話をした²。発足当初の情報学環では「〈情報と人間〉学域」が私の担当であったからだ、人文科学を専攻する者が情報学環のような新しい組織に加わることの意義について

* 東京大学大学院情報学環教授（大学院総合文化研究科・教養学部 兼任）

キーワード：記号論、メディア論、情報記号論、メディア記号論、文字学

話したつもりである。

情報学環設立の周知のためのシンポジウムであり入試の直前でもあったから、「もし私が試験官ならば、次のような問題を出題するだろう」と半ば冗談めかして提起した問いは次のようなものだった－

問い：

「情報と人間」の関係をめぐって、「東京大学大学院・情報学環・学際情報学府」設立の人類史上の意義を述べよ。

いかにも大げさな「出題」だが、私が示した「解答例」は、

答え：

「人類」と呼ばれた生物による文明が20世紀末から21世紀初頭に経験した三つのゆ

らぎに対する＜愚かな／賢い＞リアクション

答えの中で、私が言及した「三つのゆらぎ」とは、つぎのようなものだった－

三つのゆらぎ

その1「人間」のゆらぎ、あるいは、Post-Human

その2「知」のゆらぎ、あるいは、Interdisciplinary

その3「大学」のゆらぎ、あるいは、Interfaculty

人間のゆらぎ、知のゆらぎ、大学のゆらぎに私の講義は少しでも「賢く／愚かでなく」答えられただろうか。私自身が自分の成績表を出すべきときに来ている。

1. 「情報記号論」講義の出発点

1.1 理論的背景

「情報記号論」をテーマに講義をするという構想は、1999年に情報学環・学際情報学府設立に参画する過程で私自身が抱いたものだ。

1993年の教養学部前期教育カリキュラム大改訂以来、教養学部前期課程総合科目で「記号論」を私は担当していた。記号論は長い歴史をもつ学問であるが、東京大学で正規のカリキュラムのなかに科目として位置づけられたのはこれが最初である。同じ93年には大学院総合文化研究科に言語情報科学専攻が発足し「言語態分析」講座を担当したが、「言語態研究」とは「社

会や文化の単位としての言語活動の研究」であるという定式を与えたのも私である³。

私自身は19世紀フランスの詩人ステファース・マラルメの詩の形成を構造主義以後の詩学の方法により研究することから出発した研究者だが⁴、1990年代はミシェル・フーコーの翻訳を責任編集し⁵、社会学者のピエール・ブルデューと研究セミナー⁶を開いたり、レジス・ドブレやベルナール・スティグレールらとメディアロジーのシンポジウム⁷を組織したりして研究領域を拓げていく時期だったから、言語

態分析講座では、言説分析やメディア論と詩学理論とを架橋する「社会のポイエーシス」をテーマに講義をおこなっていた⁸。

言語態研究は言説の実践（プラクシス）の研究であり、詩学研究は言説の創発（ポイエーシス）の研究である。記号論は、言説や表象を生み出す記号要素の研究である。記号論を基礎に、言語態研究による言説の社会・文化研究、詩学研究による言説や表象の制作の研究を結ぶというフォーメーションを1990年代には組み立てていたのである。

2000年からの情報記号論の導入は、この配

置に新たな次元を加えることになった。それはメディアとテクノロジーの問題系である。

情報をキーワードにした大学院で研究教育に携わることになったとき、私のなかでは自分の理論パラダイムのうち、記号論を使って情報学と架橋すべきだという明確な判断があった。それは、ロック、ライプニッツ以来、記号論（semiotics）が、一方では現代の言説と表象の理論の基礎にある学問であると同時に、他方では現代の情報科学の源流となった知の系譜だからである。

1.2 情報記号論の認識論的位置

2000年度の夏学期から3年間は「情報記号論の諸問題」のタイトルで講義を行った。第一期の学際情報学府（2000年度-2003年度）のカリキュラムは各教官が全専攻生に対して入門的講義を行うというフラットな設計であったから俯瞰的な講義を行うことに適していた⁹。

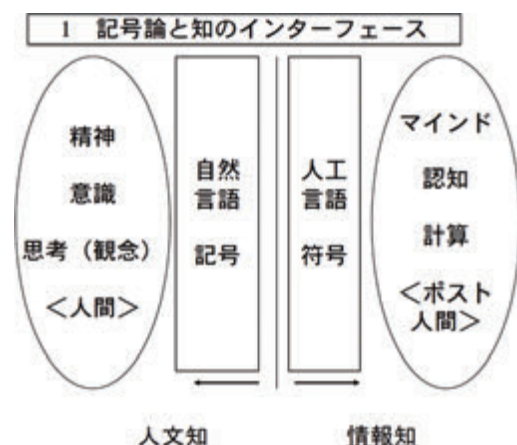


図2. 「記号論と知のインターフェイス」

このとき打ち出した情報記号論のテーゼに、「人間が〈記号過程〉に関わっているときに、機械は〈情報処理〉を担当している（While people participate in semiosis, machines participate in information processing）」がある。ひとの意味経験とマシンの情報処理というマン・マシンの界面に情報記号論の問いの圏域を設定したのである¹⁰。

この界面にそって、記号論の知のインターフェイスも定義される。[図2]と[図3]はそのときに提示した認識論的な配置である。

[図2]では、左側楕円に人文知における人間理解、右側楕円に情報知における人間理解を、〈精神〉vs〈マインド〉、〈意識〉vs〈認知〉、〈思考（観念）〉vs〈計算〉、〈人間〉vs〈ポスト人間〉として対比させ、人文知・情報知それぞれの形式化のモジュールを、中央の二つの矩形で、「自然言語と記号」、「人工言語と符号」という対比で示している。左側の形式化モジュール

2. <社会・文化> vs <自然・技術>のなかに埋め込まれた<関係>



図3. 「形式化の知と諸学の関係」

ルに記号論は固有に関わっており、右側のモジュールである情報学と接するとこの時点では考えられている。

1.3 記号過程と情報処理

記号過程 (semiosis) と情報処理 (information processing) のインターフェイス関係を提示するために、私が提起したのは、ソシュールの「こ



図4. ソシュール「ことばの回路」

とばの回路 le circuit de la parole」とシャノン・ウィーヴァーの「コミュニケーション・モデル」との補完関係である。

「ことばの回路」[図4] はソシュールが1910年頃におこなった講義のなかで提示されたものである¹¹。

図から明らかなように電話モデルにもとづい

[図2]で示した形式化の知(「記号の知」と「情報の知」)が、より広く一方における人文社会科学、他方における自然諸科学と技術工学という諸学の布置のなかに埋め込まれた関係にあることを示したのが[図3]である。

2000年代初頭に示したこの認識論的な構図は、その後も私自身のなかで基本的に変わっていない。自然言語および記号をベースに人間の記号過程(セミオーシス)をとらえる記号論と、人工言語と符号化により人間の世界を計算論化していく情報学との界面に、情報記号論の問題領域を設定しようというのが、情報記号論の試みということである。

ている。言語記号のやり取りを電話コミュニケーションのモデルにもとづいて理論化したのである。

[図4]をさらに概念化した[図5]では、脳内で起こる「概念 Concept」(=シニフィエ)と「聴覚イメージ Image acoustique」(=シニフィアン)の連合作用も書き込んでいる¹²。このソシュールのコミュニケーション図式で、固有に言語学が関わるとするのは、脳内の概念(シ

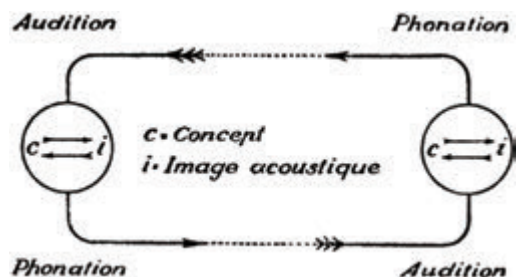


図5. 「ことばの回路」概念図式

ニフィエ)と聴覚イメージ(シニフィアン)との連合作用にかかわる心的プロセスとしての「言語体系(ラング)」の部分であって、それ以外の脳から発話(phonation)へ、あるいは聴取(audition)から脳へという生理的プロセス、および発話と聴取を結ぶ音波にかかわる物理的プロセスは、言語学 – より厳密に言えば言語記号学 – にとっては非関与的であるとされる¹³。

他方、ソシュールの図式からほぼ40年をへて1948年に提出されたクロード・シャノンの数学的通信理論もまた電話モデルに基づいている[図6]。よく知られているように、メッセージが情報源から符号化をへて受信機で復号化されて受信者に届く回路の情報量計算を可能にした図式(通称「シャノン・モデル」)である。

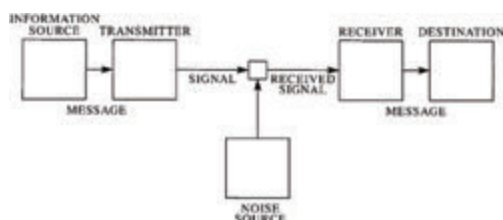


図6. シャノン「コミュニケーション・モデル」

シャノンの通信理論がもっぱら関わるのは「工学的問題 engineering problem」であり、「しばしばメッセージは意味を持っており、メッセージは何らかのシステムによって物理的あるいは概念的な一定の実体を参照する、あるいはそれらと関連づけられるものである」としても「コミュニケーションにおけるそれらの意味論的な側面は工学的問題には非関与的である」¹⁴

とされる。つまり、「情報源」と「受信者」とを結ぶ工学的回路の部分にのみシャノン・モデルは専ら関わるものであるとされる。

そこから浮かび上がるのは、ソシュールの「ことばの回路」が意味作用(signification)の心的プロセスにもっぱら関わり生理的・物理的プロセスを切り離すのとちょうど対比的に、シャノン・モデルが意味論的プロセスを切り離してもっぱら物理的信号の伝達という工学的プロセスに専念するという相互補完的な関係が電話のコミュニケーション回路を分け合っている構図である。

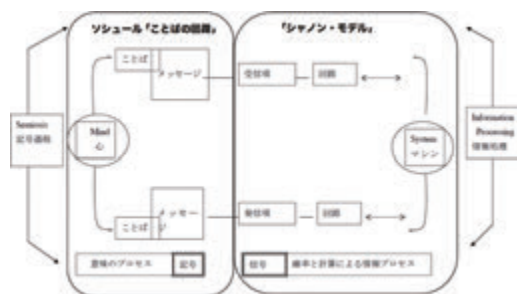


図7. 「ことばの回路」と「シャノン・モデル」

そこで、二つの図式を一つの電話コミュニケーションの回路の上にマッピングすれば[図7]のようになる。

ソシュールの「ことばの回路」は、脳を概念(シニフィエ)と聴覚イメージ(シニフィアン)の連合が起こる心の審級とし、記号(Sign)の発音/聴取によって、「ことば la parole」をコミュニケーションするパース記号論のいう「記号過程 Semiosis」の意味のプロセスである。ソシュールの「ことば la parole」は、「シャノン・モデル」では「メッセージ」に対応し、発信項/受信項

を端末とする電気信号回路の情報処理のプロセスへとつながっている。心とマシン、記号過程と情報処理、言語記号を単位とする意味のプロセスと、電気信号による数理の情報処理プロセスが同じメディア回路を分け合っている構図が浮かび上がる。

1900年の日付に対応し現代記号学の出発点にあるソシュール「ことばの回路」の図式と、

2. 情報記号論の展開

2.1 メディア記号論の視座

記号論と情報学のインターフェイスは、その基盤にある**メディアの問い**を提起する。上述の「ことばの回路」とシャノン・モデルの共通の基盤が電話回路であることが端的にそれを証している。「記号の知」を問うことは同時に「メディアの知」の探究でもあるのだ。私が2003年に出版した『記号の知／メディアの知』の書名のスラッシュは、この基本的なスタンスを打ち出したものである¹⁵。

私の記号論は、**メディア記号論**としての性格をしだいに強めていくことになった。この理論的深化はむしろ学問に内在的なものだったが、同時に旧社会情報研究所との合併による2004

50年後の1950年に位置し情報学の出発点となった「シャノン・モデル」の図式とがこのように対をなす認識論的界面の成立こそ、「人間が〈記号過程〉に関わっているときに、機械は〈情報処理〉を担当している」という情報記号論の問題圏を示すというのが、「情報記号論」講義の出発点にあった**学際的な見取り図**だったのである。

年からの第Ⅱ期情報学環・学際情報学府の発足にともなってカリキュラムが改訂され、メディア論関連科目の拡充が行われメディア論を専攻する学生が増えたこととも関連していた。私としては、いまだ明確な学的基础付けを欠いたメディア論（media studies）という異種格闘技的な学際分野に、記号論という一般学から基礎付けを与える狙いを込めたものでもあった。

教養学部前期教育「記号論」¹⁶や学際情報学府「文化人間情報学基礎」¹⁷等の授業をとおして繰り返し提示した基本的な理論線分の幾つかを確認しておくことにしよう。

2.2 メディアの文明圏

私は、メディアの文明圏を**記号・技術・社会の三次元のトポロジカルな結ばれ**として理解することを原理論としてきた¹⁸ [図8]。

これは、1990年代の言語態の探究以来の理論態度だが、記号の本質主義との基本的な差異であり、記号の問いを技術の問いと社会の問い

へと原理的に開くものである。メディアは記号論の応用領域なのではなく、記号が成立するための基本的エレメントなのである。

この考え方のもとには、私自身が「メディアの先史学」と呼ぶようになった進化論的な考察がある¹⁹。1990年代から一緒に研究を続けてき

メディアの文明圏

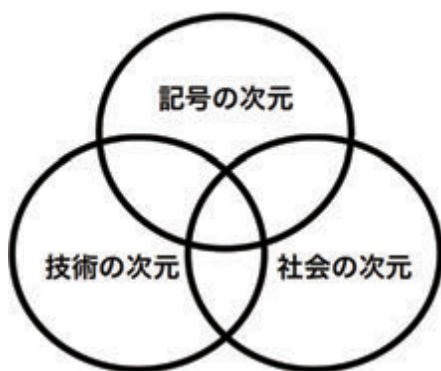


図 8. 「メディア文明の三次元」

た盟友ベルナール・スティグレールの仕事に大きな示唆を受けて定式化したものである²⁰。

この原理論では、アンドレ・ルロワ＝ゲーランの『身ぶりと言葉』²¹に依拠して、直立二足歩行による、手の解放（道具発達の起源）、脳の解放（高度な言葉・表象能力の発達の起源）、顔の成立（社会性の起源）という〈ヒトの発明〉

2.3 メディアの文字学

20世紀後半以後にメディア論を語る者はマクルーハンを避けて通れない。「ゲーテンベルクの銀河系」－活字の文明圏－に対して自らの立ち位置を明らかにすることを求められる²³。

石田のメディア記号論の中心命題は、**メディアとは文字の問題である**というものだ。そして、記号論も－言語の問題ではなく－文字の問題を基本に考えるべきであるというものだ。ジャック・デリダの『文字学について』が1967年にいち早く提起したように、記号学とは文字学なのである²⁴。

からメディアの文明圏を説き起こす。

メディアの文明圏が生まれたのは手の解放に淵源する技術進化の活動系列と脳の解放に起源をもつ言語・表象活動の進化の系列がクロスするという、手の働きが脳の働きを**カク**（描く・書く）という出来事を俟ってである。ショーヴェ洞窟やラスコー洞窟に発見されたクロマニヨン人により描かれた洞窟壁画は絵という記号に関してそれを示すものだし、シュメール文字やエジプトのヒエログリフ、古代中国の甲骨文字は文字記号に関してそれを証している²²。いずれも筆記用具と書記記号の成立というメディア問題の起源を示す出来事であって、それ以後、人間の文明とはメディア文明ということになる。もちろんそれはメディア文明以前に、あるいはその外に、身ぶりの文化、口承の文化が存在する事実を排除しない。私が啓蒙的な機会に繰り返して述べてきたように、メディア論は「**古くて新しい問題**」を扱う学問なのである。

ゲーテンベルクの銀河系以後もメディアは文字の問題であり続けてきた。あるいはむしろ、ゲーテンベルク銀河系の終焉こそメディアがテクノロジーの文字の問題として浮上した出来事だったのである。そのとき文字の問題がヒトが書く文字だけの問題にとどまらず**メディアの問題として一般化した**のである。

石田記号論では、メディアは〈テクノロジーの文字〉である、と考える。活字メディア圏では、文字の書き手はヒトであり、読み手もヒトであった。文字の読み書きは、書くヒトの意識

と読むヒトの意識を媒介する**意識のサイクル**であった。メディア問題が浮上するのは、**無意識**のレベルでメディアがヒトの意識を〈書／描〉き始めたときである。

この認識を教育の場面では、「メディアと記号についての三つのテーゼ」（石田の三テーゼ）としてまとめた。

第一テーゼ： 〈記号〉は〈テクノロジーの文字〉によって書かれている。

第二テーゼ： 〈記号〉とは〈意味〉や〈意識〉を生み出す要素のこと。

第三テーゼ： 私たち人間は、〈テクノロジーの文字〉を〈読む〉ことができない。

伴立命題： 〈メディア〉とは、〈テクノロジーの文字〉の問題だ。

〈テクノロジーの文字〉という用語が表しているのは、techno-logic（技術 - 論理的）な文字化 = 文法化（仏 grammatisation/ 英 grammatization）であり、仏語の grammatisation

technologique 英語の technological grammatization に対応する²⁵。文字とは痕跡技術による記号の文法化である。文法化がヒトの手を離れて機械によって担われ、人間の意識の閾以下 - 技術的無意識 - で意識を書くようになるのが〈テクノロジーの文字〉の時代である。

Photographie, télégraphe, phonograph, cinématographe というテクノロジーの文字の名がそれを示している。英 graphy/ 仏 graphie のギリシャ語源 $\gamma\rho\alpha\phi\epsilon\iota\nu$ は「カク（書く・描く・掻く・画く）」であり、それらの命名においてテクノロジーの文字が文字として名づけられている [図9]。

それらの文字テクノロジー - graph-technology - が、télégraphe に始まる telephone, radio (radiotélégraphe)、television という遠隔テクノロジー - tele-technology - と組み合わせあって人びとを囲い込んでいく [図10]。

19世紀以降に発明されたそれらのメディアテクノロジーが産業資本主義の世界化とともに文明を書き換えていったのが二〇世紀をともし



図9. 「文字テクノロジー」



図10. 「遠隔テクノロジー」

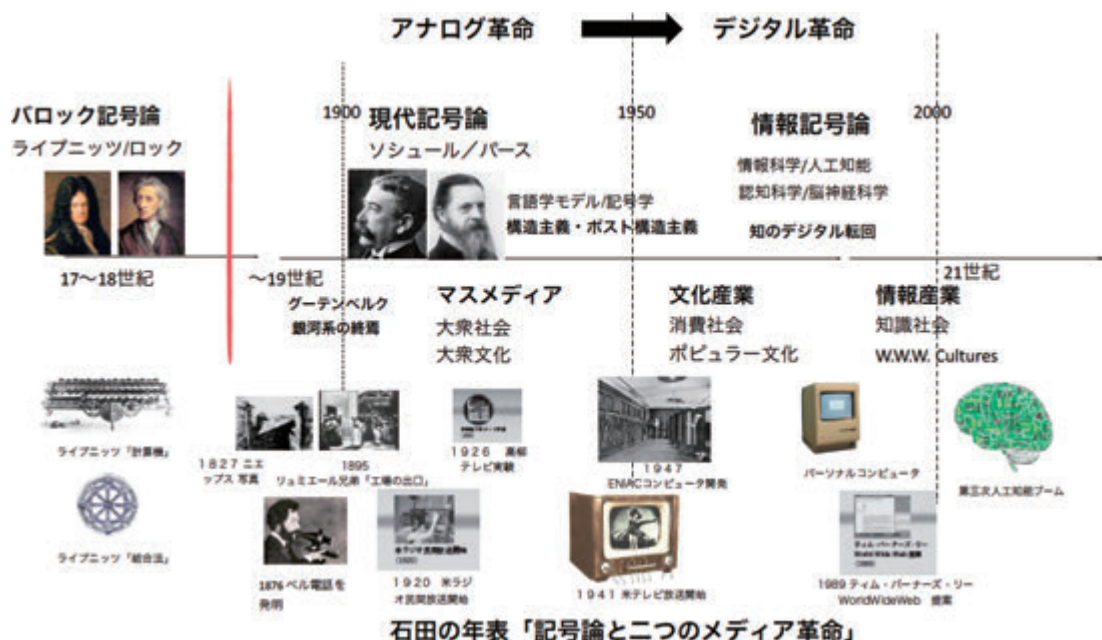


図 11. 石田の年表「記号論と二つのメディア革命」²⁷

て進行したメディア革命である。

1900 年をメルクマールの年として人類の意識生活がメディア・テクノロジーの無意識をベースに成立するようになる。フリードリヒ・キッターが「書き込みシステム 1900」と呼んだ時代の区切り（エポック）である²⁶。

20 世紀を横断するアナログ・デジタルの二つのメディア革命と、記号論および周縁諸学のパラダイムシフトをテクノロジーの変化、産業・社会・文化の変化と相関させるかたちで示したのが「石田の年表」[図 11] である。これを私は教育ツールとして教室でしばしば使った。

2.4 メディアの世紀と記号論

ソシュールとパースを祖とする二〇世紀の記

ニエップスの写真を初めとして、ベルの電話、エジソンのフォノグラフ、1895 年のリュミエール兄弟による映画の発明にいたるまで 19 世紀をとおしてアナログメディア技術が発明され、20 世紀にはラジオ、テレビ、インターネットの遠隔テクノロジーの発達によって人間文明を書き換えていくようになった。1950 年に次の区切りがやってくる。シャノン・モデルの提唱（1948）、ノルベルト・ウィーナーのサイバネティクス（1949）、フォンノイマン型計算機（ENIAC 1945）というように 1950 年を境目として 20 世紀後半に進んでいく第二のメディア革命が「デジタル革命」である。

号論を、私は「現代記号論」と呼ぶことにした。

それは一方において構造主義やポスト構造主義へといたる文化と社会の理論の基礎理論となり、他方において二〇世紀認知科学や論理主義の基礎となった。現代記号論の認識論的な位置をメディア史との関係で捉え返してみると、現代記号論がメディア革命と無縁ではまったくないことが分かってくる。

ソシュールの言語記号学の登場は、19世紀末から二〇世紀初頭にかけてアナログメディアが音声学・音韻論を誕生させたことと関係している。キモグラフやフォノグラフが書きとめる音声から音素・音韻という記号要素が取り出されたのである。「ことばの回路」が電話をモデルにしていることもすでに上で見たとおりである（上記1.3）。映像の記号学の発達も写真や映画といった視覚メディアの発達と平行している。

パースの記号論とメディア革命との結びつきはより複雑である。パースは19世紀の後半からカントのカテゴリー論を自身の一次性・二次性・三次性のカテゴリー論に組み替える企てをはじめた。彼の計画は記号論による論理学の包摂というロックによる記号論の計画を受け継ぐ側面をもち、類像・指標・象徴の記号の三分類はイメージや感覚質のレベルにまで論理学を拡張する企てでもある。論理式や論理計算の提案は二〇世紀の認知科学や計算機科学を準備するものでもあった。パースは「アメリカのカント」とはカール・オットー・アーペルの表現²⁸だが、私は授業ではパースはエジソンの世紀のアメリカのカントだと繰り返してきた。

記号論の認識論は、そのように、二〇世紀のメディア技術と強い相関関係にあり、まさにメディアの世紀における意味世界を理解するべく登場してきた一般学なのである。それが、冒頭に引いたソシュールによる「社会のなかにおける記号の生活を研究するやうひとつの学」の提唱の狙いであり、「それはまだ存在しないのであるから、どんなものになるかはわからない；しかしそれは存在すべき権利を有し、その位置はあらかじめ決定されている。」という確信に満ちた投企の意味である。

しかし、「石田の年表」に示したように、二〇世紀のメディア革命のうちアナログ革命に應えるように登場した現代記号論は、二〇世紀後半をとおして進行したデジタル革命に適応しうるヴァージョンアップを求められている。そのデジタル革命は、ロック、ライブニッツの時代の**バロック記号論**の延長上で実現したコンピュータの革命である。であるとすれば、二一世紀の記号論はバロック記号論の原点に立ち戻りつつ新たに生まれ変わる必要があるというのが、私が描いてきた理論戦略である。情報コミュニケーションテクノロジーにすべてが結ばれ、人の経験と思考が機械にトレースされデータ化されプログラム化される時代の記号論を「情報記号論」と呼ぶことにしたのである。この理論的更新の企ては、別のやり方で記号学を提唱したソシュールの身ぶりを繰り返すことであり、二一世紀において、情報記号論は、**存在すべき権利を有し、その位置はあらかじめ決定されている**と考えられるのである。

2.5 記号の正逆ピラミッド

情報記号論が扱うメディアのインターフェイスをパース記号論のアイコン（類像）・インデックス（指標）・シンボル（象徴）の三分類をもとに図式化したのが「記号の正逆ピラミッド」である。

ダニエル・ブーニユーがパースの記号論を組み替えて提示した「記号のピラミッド」の図式²⁹をさらに発展させて、その下部構造に「記号の逆ピラミッド」を加えることで、メディア・コミュニケーションにおける〈記号過程〉とメディア・テクノロジーによる〈情報処理〉のインターフェイスを概念化する記号図式である〔図 12〕³⁰。

アナログ・メディアとの界面においては、記号の痕跡は、信号化される。アナログ信号は、さらに、デジタル変換され数値化され、さらにプログラムによる計算化・アルゴリズム化のプロセスへと向かう。〈記号過程〉の痕跡は、機械によって〈情報処理〉されるようになる。

「記号の逆ピラミッド」の部分が、20 世紀以後のメディア文明の「記号の生活」を支えるよ

うになった。

人間の心（mind）は、身体（body）のレベルで情報処理（information processing）のプロセスと接する生活を営むようになった。コンピュータとの界面（インタフェース）で、人間の心（mind）と機械の計算（computation）が向き合うようになった世界である。上（I.2）に述べた、人間がセミオーシス（記号過程）しているあいだに、マシンは情報処理している生活である。この図は、そのように「情報記号論」の基本図式として機能するのである。

この図式を使って、機械による情報処理のプロセスをマッピングすることができるばかりでなく、メディア・インターフェイスにおける、精神・身体・機械の関係（左辺矢印）、文字・像／痕跡・数字・式という痕跡技術との対応（右辺矢印）を示すことができる。

この図式は、さらに、知の見取り図をも与えるのであって、記号の正ピラミッドの上位には、ことばと論理の知、中位には、イメージの知、下位には、現象と痕跡の知、逆ピラミッドの情報処理のプロセスには、物理信号、二項数値化とアルゴリズム計算の知をマップすることができる。下部構造をなす逆ピラミッドの機械化のプロセス（アナログ信号からデジタル信号、プログラム・アルゴリズム化へと向かう、メディア・テクノロジーの進化）の進行が、上部構造の記号のピラミッドで起こる知の組み替え（言語学、記号論、メディア論、現象学、一般文字学の台頭と、論理学の数学化）と平行して進むことも、この記号図式から理解されるはずである。

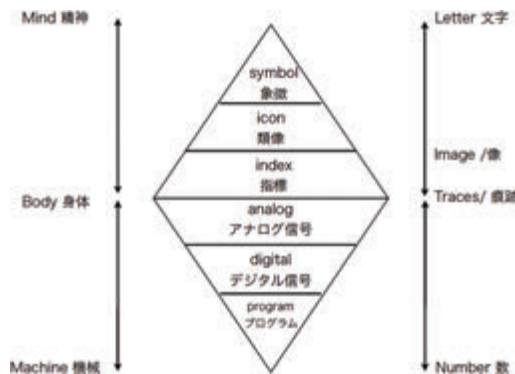


図 12. 「記号の正逆ピラミッド」

3 新しい〈記号の学〉の探究

2009年度から「新しい〈記号の学〉」をテーマに、二〇世紀以後の「人間の学」のメディア論的基礎を問い直し、情報記号論の領域を探る作業を行った³¹。そこで扱われた問題系の概略を記しておこう。私自身はこの試みを、カント、マルクスのいう批判の延長上で意味批判として

理論化してきた。記号とは意味経験の形式であり、意味は超越論的に – パース記号論の用語でいえば解釈作用の無限のセミオーシスをとおして – しか扱いえないというのが、ソーシャルやパースの現代記号論においても、そして、新しい〈記号の学〉においても前提である。

3. 1 「技術的無意識」の変容

キットラーのいう「書き込みシステム 1900」は人間の感覚知覚、時間、運動、意識と無意識、言語、論理の成立条件を根本的に書き換えた。フーコーが『言葉と物』で「経験的 - 超越論的二重体」としての〈人間〉の消滅を予告したエピステーメの転換ともそれは対応している³²。

写真はヒトの意識の閾値以下で像を撮り、人間は視えなかった瞬間の像をもとに思い出の意識をつくる。映画の毎秒 24 コマの静止画像の流れの一コマコマを認知できないので、動きを見てとる運動視の意識が生みだされる。フォノグラフが記録した音波を物理的に聴くことができないから、意味を持った音声や物音が人間には聞こえる。見えないから見える、聞こえないから聞こえる、意識できないから意識される。メディアの世紀においては、テクノロジーの文字の無意識が人間の意識の超越論的な条件

となった。これがメディア記号論のエピステモロジックな位置である。

しかし二〇世紀後半のデジタル革命によってその技術的無意識のあり方が変容する。テクノロジーの文字が数字となり計算論的無意識 – the computational unconscious – の問いが浮上する。

メディアはヒトに密着して感覚チャンネルが多様化し、デジタル化によりサイバネティクス化・再帰化する。記号の正逆ピラミッド図式の逆ピラミッド部分の技術進化によってメディア自体が記憶し計算し確率論的に予測するようになる。二一世紀にはコンピュータが生の普遍的な無意識となる「記号の生活」を人びとが生き始めているのである。「カメラをもった人」の無意識から、「計算機をもった人」の無意識への変容と私はこの変化を表現した³³。

3. 2 「リビドー経済」批判

20 世紀前半にはメディア・テクノロジーを基盤に大衆の意識が産業的に生産されるようになった。そのような意識の産業化を批判したのがアドルノ・ホルクハイマーによる「文化産業」

論だった³⁴。アドルノ・ホルクハイマーはカントの図式論を援用することで「大衆欺瞞としての啓蒙」による意識の産業的図式化を批判した。

二〇世紀のアメリカ型資本主義は、生産サイドにおけるイノベーションとしての1) フレデリック・テイラーによる「科学的管理法」と2) テイラーシステムの産業的実装としてのフォーディズム、消費サイドにおけるイノベーションとしての3) ハリウッドという「夢の工場」(Dream factory)、そして4) フロイトの甥エドワード・バーネイズが体系化したマーケティングを柱とした。文化産業批判はこの3) と4) の柱に関わっていた³⁵。

二〇世紀の資本主義批判には、マルクスの経済学批判とフロイトのリビドー経済論を組み合わせる理論が求められた。マルクス主義のサイドからそれに応えたのがフランクフルト学派だった。

他方で、第二次世界大戦後の資本主義世界が消費社会への爛熟を迎えたところに構造主義・ポスト構造主義の批判パラダイムをもたらしたのが現代記号論だった。ボードリヤールの『記号の政治経済学批判』³⁶やドゥルーズ・ガタリの『資本主義と分裂症』³⁷がそれを表している。日本における記号論の受容が1980年代から

1990年代のいわゆる「バブル経済期」に集中したこともそれを証している³⁸。

二一世紀の情報記号論には、デジタル・メディア時代の情報資本主義の批判を可能にする理論パラダイムの更新が求められている。情報資本主義は「注意力の経済」(ハーバート・サイモン)³⁹の性格を強めているが、その原因は「記号の正逆ピラミッド」図式で示したような、メディアのマトリクス化・サイバネティクス化・アルゴリズム化である。インターフェイスのリアルタイム常態化(「24/7の資本主義」⁴⁰)、身体化、接触型化について体系的な理論をつくることも情報記号論の役割となる。二〇世紀のような欲望の同一化モデルによるリビドー論ではなく、モジュール化、ハイパーコントロール型の欲動理論、統計学的な情動のコントロール理論へとリビドー経済批判を転換させる新しい批判パラダイムである。それは記号と情報のインターフェイスの深化を理論化し、リビドーとテクノロジーが絡み合う現代資本主義の批判のための視座を提供することである。

3.3 「心の補助具」と「記号接地」

「フロイトへの回帰」をテーマにフロイトの「心的装置」論の再検討を入り口にして、「心の補助具」とヒトの「心」の関係を問うセッションを数年間続けた。メディア・インタフェースの問題や心脳問題の議論と結びつくテーマである。

ソシュール、フロイト、フッサールらの仕事は、メディアを人間の心のモデルを書くための文字としているところに特徴がある。そのモデ

ルはフロイトにおいて「心の装置」と呼ばれた。**心はメディアの形をしている**、というのは心がテクノロジーの文字で書かれる時代に必然的な認識論的メタファーなのである。

フロイトにおいては、さらに、**心は脳のかたちをしている**という、フロイトの第二局所論が示す脳神経科学的なメタファーとも心のモデル化は重なっている[図13]⁴¹。19世紀後半以後、メディア・テクノロジーの発達とニューロンが

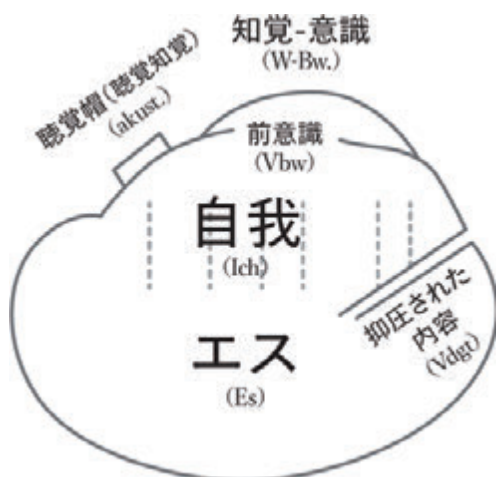


図 13. フロイト第二局所論

発見され脳の機能中枢が発見されていく過程とは同時に進行する。メディア・テクノロジーと脳神経科学のこうした平行関係のなかで、心を理論化する認識の配置は、その後の二〇世紀後半の認知科学から人工知能まで継続しているといえる。

脳とメディアが出会うとき、心の問題は、こうした知と技術のインターフェイスにおいて理論化される。フロイト以降の二〇世紀思想の主体パラダイムは基本的にこの構図のなかで描かれてきた。

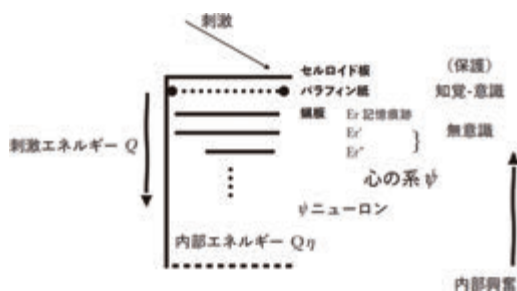


図 14. 「不思議メモ帳」と「心の装置」

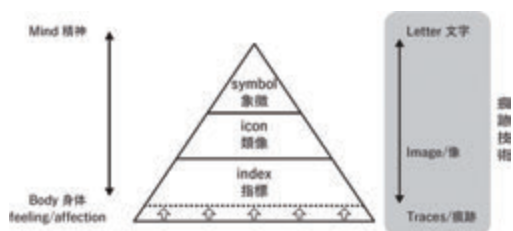


図 15. 「記号の正逆ピラミッド」と「記号接地問題」

フロイトの論文「不思議のメモ帳 についての覚え書き」で取り上げられた筆記用具 Wunderblock がフロイト局所論の図と近似していたように [図 14]⁴²、マッキントッシュ iPad のようなメディア端末はヒトの「心の装置」とますます相似を深めつつある。

心の装置と心の補助具が一对一对応する日常生活へと人びとの生活は移行しているのである。

メディア・インターフェイスとの関係がこのように密着していくと何が起こるのか。心の補助具が心と同形化してアヴァター化し、人間の心とマシンとの境界の画定が焦点化してくる。記憶と外在化されたメモリー、リアルとヴァーチャル、意識化とデータ化、等の原理的対比が逆にクローズアップされてくる。情報処理の論理と記号過程の論理が記号のピラミッドのボトムの部分で認識論的な突き合わせを求められるようになる。パース記号論のいう「基底」や「感覚質 (クオリア)」、フッサール現象学のいう「意識流」や「時間性」、デリダ文字学のいう「原エクリチュール」や「差延」などの理論的射程が、人工知能の「深層学習」や「記号接地問題」等との対比であらためて問われるようになるのである [図 15]⁴³。

3. 4 コミュニケーション批判



図 16. ソシユールの「ラング」と「集団脳」

アナログメディア時代のテレ・テクノロジーは、電話線で結ばれるような一対一（あるいは一対多）のコミュニケーションを基本としていた。

上述したようにソシユールはことばのコミュニケーションを電話モデルで理解したが、それは同時に脳に中枢をもつ記号のお互いの脳への相互記入という集団脳の成長の図式であったと

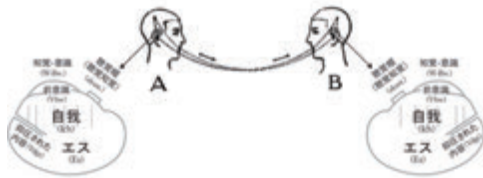


図 17. ソシユール「ことばの回路」とフロイト「心の装置」

3.5 批評のプラットフォーム

テクノロジーの文字で書かれるメディア現象を批判・批評するとは具体的にはどのようなことなのだろうか。

私たちは上で (2.3) メディア現象の技術的

も理解できる [図 16] ⁴⁴。

ソシユールの図式にフロイトの脳の局所論モデルを組み合わせると、無意識のコミュニケーションという問題の次元が現れる [図 17] ⁴⁵。二〇世紀のメディアコミュニケーションはアナログメディアにおいてもすでに集団心理学的な問題次元を伴っていたのである。

ハイパーリンクによる、デジタルメディアのコミュニケーションでは、多対多のネットワーク型コミュニケーションへと移行した。ソーシャルメディアのようにアルゴリズムがコミュニケーションを自動化することにより、断片的なメッセージが指数級数的に増殖する。メディア・テクノロジーの高度化により接触性・即応性が増し、身体の深いレベルにまでコミュニケーションが侵入して、無意識のレベルでの模倣と感染のコミュニケーションが技術的にサポートされるようになった。

このようなテレ・テクノロジーのデジタル化と普遍化もまた情報記号論の研究アジェンダである。「情動論的転回」が主張され、タルドのミクロ社会学やドゥルーズ・ガタリの「言表行為の集団的連鎖」が再評価され、あるいはルネ・ジラルールの模倣理論が参照される背景にはこのようなテレ・テクノロジーのデジタル転回の理論化という課題が浮かび上がる ⁴⁶。

無意識について指摘した。映画やフォノグラフ、テレビジョンが生み出すメディア現象はフッサール現象学のいう「時間対象」として成立している。人間の認知能力に対して、それら



図 18. 「テレビ分析の知恵の樹」

の時間対象は人間の認知を超えたスピードで流れるので私たちはそれを生みだしている仕組み（映画の一コマ一コマの分節）を識別できず、どのように意味が生みだされているのかをつぶさに検証することができない。他方で、メディア現象が生みだす意識は膨大で人間の記憶能力を超えアーカイヴがなければ過去の経験を捉え返すことができない。アナログ・メディアの時代には、映画を見るという経験は、映画ライブラリーから当該フィルムを取り出し映画のフィルムを検証するというような膨大な努力を払う以外に記憶と印象批評しか方法がなかった。

しかし、現在のデジタル・メディアの時代に

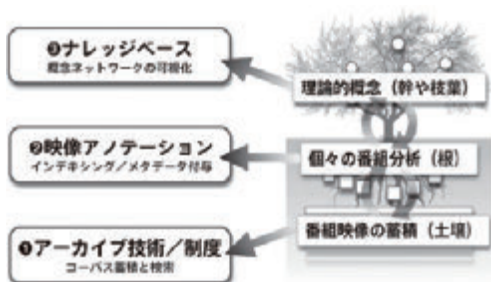


図 19. 「批評プラットフォーム Critical Plateau」

は、時間対象にメタデータを付けコメントする批評行為は容易である。コンピュータに十分なメモリがあればアーカイブ化も容易であり、時間対象についての批評ははるかに容易である。

こうした考え方に立って、1) テレビ番組デジタル・アーカイブ、2) ハイパーメディア型理論事典「テレビ分析の知恵の樹」、3) 映像インデキシングとメタデータ付与、3) 知識共有ネットワークからなる、「批評プラットフォーム Critical Plateau」を制作する科研費研究プロジェクトを石田英敬研究室では三期（2005～2013）にわたって行った〔図 18,19〕⁴⁷。文学テキストの批評が、ライブラリーの成立、対象テキストと批評のメタ言語との結合、引用、辞書知識の参照、ピアレビューによる検証と知識共有という批評の手続きからなるように、メディア・テキストを意味批判のメタ言語プラットフォームに載せる研究である⁴⁸。

また、その延長上で、新図書館計画のためのハイブリッド・リーディング環境を構想したりもした⁴⁹。電子書籍の端末を媒介に書物の知とメディアの知を往還させるハイブリッド環境をデザインするプロジェクトである。いずれも、デジタル環境をベースに、メディア現象を文字ベースの知と結びつけて批評環境を生みだすプロジェクトである。これらは人文学の知とデジタルメディア環境を結びつけるデジタル・ヒューマニティーズの追求と位置づけられる。

以上の批評プラットフォームやハイブリッド・リーディング環境の設計は、メディアのテクノロジーの文字が生みだす意味・意識の経験－セミオーシス－をデジタルなテクノロジーの文字を活用して批評・批判することを可能にす

る。

だが他方で上記 3.4 であげたようなテレテクノロジーがハイパーリンクで結びついていくようなメディア現象や、アルゴリズムのセミオーシス、ビッグデータと呼ばれるような大量なデータの集積がどのような意味の星雲を形成し

ているのかを批評・批判することを可能にするわけではない。今後のデジタル・メディアの批評・批判はそのような現象を扱いうるデータ解析や統計学的視点をも組み込んだ方向へと研究方向を拡げていくことが考えられる。

4. 文明の療法としてのメディア記号論

4.1 「メディア文明のなかの居心地悪さ」

私はメディア文明についての所見をもとめられるたびに、フロイトの『文化の中の居心地悪さ *Das Unbehagen in der Kultur*』の一節を引用して「メディア文明のなかの居心地悪さ」を語ってきた⁵⁰。

人間はいつてみれば一種の「補助具をつけた神」、補助器官をまとえばたしかに目覚ましいが、人間とともに成長したわけではなく、しばしば危難を人間にあたえる補助器具をまとった神となった。⁵¹

現在では、人類の過半数がインターネットに接続しモバイル端末を携行して日々生活している⁵²。情報通信機器という補助具をまとえば世界中のどこからいつでも遍在的コミュニケーションに参加することができる。人間はたしかに「補助具をつけた神」に近づいたといえよう。しかし、それらは「人間とともに成長したわけではなく、しばしば危難を人間に与える補助具」である⁵³。

メディア・テクノロジーには、人間の意識がテクノロジーの無意識によって生みだされるこ

とにともなう、人間にとっての抜きがたい不安 – まさしくフロイトのいう「居心地悪さ *das Unbehagen*」 – がつきまとっている。人間の意識の自律的コントロールを外れたところで、テクノロジーの無意識が社会を結びつけ集団的な意識／無意識をつくり出している。二十世紀前半のアナログ革命にいち早く適応して台頭した政治勢力はファシズムやナチズムだった。近年のソーシャルメディアをめぐる様々な問題や世界的なポピュリズムの台頭を見るにつけ、デジタル革命がもたらしつつある変化もまた同じような深刻な「危難」をもたらしつつあるようだ。

日常の生においてもまた、メディアは私たちの精神の自由を脅かしつつある。最終年度の今年、情報記号論講義で、私は次のような中間レポート出題をおこなった。

ジャン・ジャック・ルソーは『社会契約論』の緒言で、「人間は生まれながらにして自由である、しかし、いたるところで鎖に繋がれている（« L'homme est né libre et partout il est dans les fers. »）」と述べていた（Jean-Jacques ROUSSEAU, *Du contrat*

social 1762)。

しかるに、人類の現状を鑑みるに、「人間は生まれながらにして自由である。しかし、いたるところでネットに繋がれている」と

4.2 「情報」のニヒリズム

「砂漠が広がる、災いなるかな内に砂漠を秘めたる者は！ Die Wüste wächst：Weh dem, der Wüsten birgt!」とはニーチェの『ツァラトゥストラはかく語りき』の一節である⁵⁴。

この引用で「砂漠」は**虚無**あるいは**ニヒリズム**を差している。ニーチェが十九世紀末に診断したニヒリズムは、加速する産業社会における**情報**と無関係ではない。

19世紀には1832年創設のHavas通信社（現AFP）を嚆矢としてReuterなどの通信社により、ヨーロッパの投機市場のために、最初は伝書鳩のリレーによって、つぎには電信電報の伝達ネットワークを通じて、世界中から「情報」が届けられ、輪転機が「鑄流し記事」として「ニュース」を大量に印刷するようになる。世界はこのころからメディアによる「同時性」のコミュニケーションに結ばれてゆき、世界からもたらされる情報の増大によって、ヨーロッパ市場の株価が大きく変動する時代に突入した。19世紀前半からすでに世界は「情報資本主義」へと進んで来たのである。

産業化していく世界におけるエントロピーの増大に比例して、世界中に**虚無**が蔓延していく。ここでいう「エントロピー」には二つの意味がある。資源の搾取・加工・流通・消費に関わる熱力学法則のいうエントロピーがそのひとつ。もうひとつは情報の拡散に関わる情報量と

言えるのではないか。この情報文明を私たちはどう考えるべきか？ どう生きるべきか？ どのような知が求められると思うか？ 自由に論述せよ。

してのエントロピー（クロード・シャノンの情報理論のいう「情報量」）である。そして、その両者は深く結びついている。

市場が発達し産業革命が進行しエネルギー消費が増大するほどに、地球環境は破壊されてエントロピーは増大し、文字通り砂漠が広がる。他方で、市場に世界からもたらされる情報が増大すればするほど情報エントロピーは増大し虚無が広がる。すべてが情報化していくと、人間文化の意味は短期間に消費され、ニュースは翌日には無に帰し無価値になる。その果ての「ポスト・トゥルース」とはニーチェが診断したニヒリズムの時代なのである。

ヴァレリーは「石油や小麦や金」と同じ意味での「精神」の市場価値の「下落」を語ったが⁵⁵、彼が警告したのも、情報エントロピーが増大し続けて、世界が虚無にのみ込まれていく「精神の危機」である⁵⁶。情報が氾濫すると言葉の価値は短期的に変動し、心に砂漠が広がる。

私がかつてパリ大学で博士論文を献げたヨーロッパ世紀末の詩人マラルメは情報エントロピーの増大に抗して、「骰子の一擲は偶然を廃さず UN COUP DE DÉS JAMAIS N'ABOLIRA LE HASARD」という〈反・新聞〉の〈詩〉を制作した⁵⁷。「世界は一冊の美しい書物に到達する Le monde est fait pour aboutir à un beau

livre.」として、一冊の書物を世界の虚無に對置しようと企てた。詩とは、情報エントロピー

の増大に抗する「マクスウェルの魔」のような企てなのである⁵⁸。

4.3 〈補助具をつけた人間〉のコギト

ヒトと機械、意味と情報との界面に「情報記号論」の問題領域を私は設定した、機械がヒトの意識下で意識をつくりはじめると〈人間〉がゆらぐ。〈無意識〉が露呈する。二十世紀の人間科学はその断層の上に**無意識の知**として生まれた。〈記号〉の問いはこの**人間のゆらぎ**に発している。

記号はテクノロジーの文字によって書かれ、ヒトによって事後的に認知される意味および意識の要因である。二〇世紀以後、人間にとって意味・意識はつねにすでにテクノロジーの文字に遅れてやってくるようになったのである。

この遅れはしかし、意味の知／意識の知の無効化を意味しない。そうではなく、むしろ意味の知／意識の知の根本的な更新－人文知の更新－を私たちに求めて記号を送ってきているのである。人文学者としての私が「情報記号論」によって応えようとしたのは、そのような記号論の要請だったと私は考えているのである。

その記号論の問いは、例えば、次のように〈補助具をつけた人間〉の問いを問うときにすぐさま露呈する－私がカメラのシャッターを切り写真をとるとき、〈写真を撮る私〉とは〈誰〉なのか？

脳神経学的な知見と自由意志との関係を問題提起したものとして、「リベットの実験」が有名だ⁵⁹。〈私〉が写真家であるとして、写真を撮る〈私〉が、〈自由意志〉によって意識的に〈い

ま〉シャッターを切ったと考えるとしよう。そのときの時間プロセスは、リベットの実験の論争点をふまえれば次のようになる。

I 〈私〉がシャッターを切る実際の指の〈行為〉の〈いま〉よりも八〇〇ミリ秒前に脳神経でシャッターを切る〈準備電位〉が始まっている。

II 〈私〉が「シャッターを切る〈意欲〉を持ったと〈私〉が事後的に意識する〈時点〉は、シャッターを押す指の動きの200ミリ秒前である。

III 脳活動の電位変化の観測からみれば、〈私〉がシャッターを押す〈意欲〉を持つのは、じっさいにはそれよりも遅く、指の動きの150ミリ秒前である。

IV そして、シャッターが切られる。

リベットの実験が教えてくれる、シャッターを切るという決断と行為をめぐる脳神経学的な時間プロセスはだいたい以上ようになる。

しかし、写真のシャッターチャンスの場合、時間と意識の問題はそれだけにはとどまらない。写真機のシャッターはヒトの意識の知覚閾の下の時間幅で時間を切り取るので、メディアの「技術的無意識」と呼んだ問題系が介在することになる。ヒトは写真機が撮った〈いま〉の瞬間を、事後的にしか視ることができない。「写真は誰がいつ撮ったのか？」という、極めて複雑な問いには、1) 脳神経学的な無意識と時間性、2) 技術的な無意識と時間性、さらに、3) 撮った瞬間を視ることは出来なかったが、撮ら

れた写真を前に、事後的に「〈私〉が撮った」という事後的な時間意識においてその像を捉え返す、写真を撮る〈私＝主体〉が総合されるという、複雑な時間経験が介在していることになる。

これが「カメラをもった人」という〈補助具をつけた人間〉の cogito – Je photographie, donc je suis. 我撮影ス、故ニ我アリ – をめぐる問題状況である。

この複雑なオペレーションを通して、写真技術 photography という〈テクノロジーの文字〉を書く「自由な」表現主体と、記号表現としての「写真 photograph」が文化的に成立するのである。メディア時代の表現とはそのような神経学的・技術的・文化的な人間の営為なのである。

「コンピュータをもった人」もまた「カメラをもった人」と同じようなテクノロジーと無意識の問いを前にしている。しかし、彼女／彼の判断力の行使にはさらに「計算論的無意識」の問題が加わっている。インターネットのサイトを訪れるたびにあなたはそのサイトの情報オントロジーに招じ入れられる。あなたのブラウザーの cookies に応じてあなたに向けたサービスが提案される。あなたがネットをブラウズしている間に表示されるターゲット広告は、あなたのプロフィールに応じて、クリックの0.1秒の間に競売にかけられて競り落とされて表示されている。そのように、アルゴリズムによってあなたは Web メディアのセミオーシスのなかに編入されるようになっている。デジタル革命以後のメディア経験においては、人間の意識下の時間幅でアルゴリズム計算が働くようになって

たのである。

では、コンピュータに補助されて〈思考スル cogitatio〉とはいったい〈誰〉の〈私ハ考エル cogito〉なのか？いったい誰がいつどのように検索し推論し知識を得て思考しているのか。〈コンピュータをもった人〉の〈理性〉には、それまでにはなかった計算論的・確率論的な技術的無意識の次元が新たに加わったのである。あなたがコンピュータをもった人としての〈思考〉をとおして〈自己〉でありつづけるためには、コンピュータのメモリーに支援され、検索アルゴリズムに誘導されて実行される自分自身の思考プロセスをも捉え返しうる、〈自己のプラットフォーム〉を形成しえていることが不可欠なのである。

〈補助具をつけた人間〉の自律と自由を思考しうる知のみが、二〇世紀以降のメディア文明における存在の耐えられない居心地悪さを思考しえて、ついに〈人間の知〉を回復することができる。それこそが、「情報記号論」講義の深い動機となった「情報と人間」の問いの核心であり、一九年間の講義がめざして進んできた新しい思考の在り方であったように私には今思えている。

機会あるごとに、私は2000年に始まった情報学環の企てを航海譚に喩えた⁶⁰。全学から多様な知・多様な表現・多様な技をもつ乗組員を募って船を組み、新たな真理の「金羊毛」を持ち帰るアルゴナウタイの冒険譚。あるいは、それは知のオデュッセイアともいうべきかもしれない。ホメロスにおいて、オデュッセイウスの呼び名は、polymetis（多くの知恵の人）、polytropos（多くの表現の人）、polymechanos（多

くのデバイスの人)である。

学際の知 polymetis、意味の知 polytropos、テクノロジーの知 polymechanos…。私の情報記号論講義は、少しでも、知のオデュッセイア

への呼びかけに応えることができただろうか。

次の冒険のサイクルは、新たなアルゴナウタイの勲 (gestes) にかかっている。

註

- ¹ Ferdinand de Saussure, *Cours de linguistique générale*, édition critique par Rudolf Engler, tome 1, éd. Otto Harrassowitz, Wiesbaden, 1989, p.48 石田による訳
- ² 東京大学大学院情報学環・学際情報学府設立準備シンポジウム 2000 年 3 月 5 日 山上会館ホール
- ³ 石田英敬「言語態とは何か」、山中桂一・石田英敬編『シリーズ言語態 1 言語態の問い』、東京大学出版会 東京 2001、pp.1-7
- ⁴ *La formation de la poésie de Mallarmé : des oeuvres de jeunesse à "Igitur"*, thèse de doctorat présentée à l'Université de Paris-X-Nanterre, année universitaire 1987-1988, soutenue en janvier 1989 avec mention "très honorable à l'unanimité", devant le jury composé de Ms.et Mme les professeurs Nicole Bouléstreau, Michel Arrivé, Henri Meschonnic, Jean-Claude Matthieu, 1,000 p., éditée sous forme de microfiche (A.N.R.T. Université de Lille, 89,13,08152/89)
- ⁵ 『ミシェル・フーコー思考集成』(蓮実/渡辺監修)、責任編集 石田英敬・小林康夫・松浦寿輝 全 10 巻 筑摩書房 東京 1998-2001 年
- ⁶ « Genèse et structure du champ littéraire », seminar with Pierre Bourdieu, Univ. of Tokyo, with PierreBourdieu, Hasumi Shiguéhiko, Komori Yoichi, Kobayashi Yasuo Nov 11.1994 (『文学場の生成と構造』『文学』(岩波書店) 1994 年冬号、pp.54-65 として刊行)
- ⁷ « Le Colloque Franco-Japonais sur la Médiologie », Univ. of Tokyo, with Régis Debray, Bernard Stiegler, Daniel Bougnoux, Masachi Osawa, Osamu Nishitani, Yoichi Komori, Shûnya Yoshimi Nov11 1995
- ⁸ この講義については、「詩の言語と数の言語 ～『社会のポイエーシス講義』への補論 ～」『言語・情報・テキスト』vol 25-1.2018.12.20 東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻〔編〕pp.1-14 を参照されたい。
- ⁹ 2003 年度の講義は東大 OCW で公開されている。https://ocw.u-tokyo.ac.jp/course_11301/ (2019.01.31.20:00 JST アクセス)。
- ¹⁰ コンピュータをメディアととらえてコンピュータに媒介された記号の生活を研究する記号論の研究はコンピュータ記号論、サイバー記号論などの呼称で二〇世紀末から研究が進められてきた。その系譜は、ジェイ・デイヴィッド・ボルターの『ライティング・スペース』(黒崎政男、伊古田理 他訳 産業図書 東京 1994 原書初版 1990) あたりを出発点にして記号論やポスト構造主義を援用しつつ発展し、ANDERSEN, Bøgh Peter の *A Theory of computer semiotics* (Cambridge University Press Cambridge 1991) がコンピュータをメディアとして扱う記号論としてその方向を初期に明確に打ち出した代表的著作である。人とマシンのインタフェースに情報記号論の問いを設定しようという石田の情報記号論はこうした系譜から出発している。
- ¹¹ Ferdinand de Saussure *Cours de linguistique générale*, éd. critique par Tullio de Mauro Payot Paris, 1972, p.27
- ¹² 同書 p.28
- ¹³ 同書 pp.28-29
- ¹⁴ Claude E. Shannon and Warren Weaver *The Mathematical Theory of Communication*, The University of Illinois Press Chicago1963, p. 31; 邦訳 クロード・E・シャノン、ワレン・ウィーバー『通信の数学的理論』植松智彦訳 ちくま学芸文庫 東京 2009 p. 22
- ¹⁵ 石田英敬『記号の知/メディアの知 - 日常生活批判のためのレッスン』、東京大学出版会 東京 2003、第4章「メディアとコミュニケーションについてのレッスン」を参照。
- ¹⁶ 東京大学教養学部前期課程総合科目「記号論」
- ¹⁷ 東京大学大学院学際情報学府「文化人間情報学」
- ¹⁸ 『記号の知/メディアの知』前掲書 第4章3「メディアの文明圏」を参照。
- ¹⁹ 石田英敬編『知のデジタル・シフト - 誰が知を支配するのか?』弘文堂 東京 2006 第一章「<人間の知>と<情報の知> : 人間の学としての情報学を求めて」(pp.16-49) を参照。
- ²⁰ ベルナル・スティグレル『技術と時間 1 エピメテウスの過失』石田英敬監修 西兼志訳 法政大学出版局 東京 2009 を参照。

- ²¹ アンドレ・ルロワ＝グーラン『身ぶりと言葉』荒木亨訳 ちくま学芸文庫 東京 2012
- ²² 石田 英敬 (編集), 吉見 俊哉 (編集), マイク・フェザーストーン (編集)『デジタル・スタディーズ2 メディア表象』東京大学出版会 東京 2015 第1章「新ライブニッツ派記号論のために--『中国自然神学論』再論」(pp.13-44)を参照。
- ²³ マーシャル マクルーハン『グーテンベルクの銀河系—活字人間の形成』森常治 訳 みすず書房 東京 1986
- ²⁴ Jacques Derrida *De la grammatologie*, éd. du Seuil Paris 1967 p.74
- ²⁵ Sylvain Auroux *La révolution technologique de la grammatisation* Mardaga Liège 1994 を参照。
- ²⁶ Kittler, Friedrich, *Aufschreibesysteme 1800/ 1900*. Fink, Munich, 1985. (English edition : *Discourse Networks 1800 / 1900*, with a foreword by David E. Wellbery, Stanford University Press Stanford 1990)
- ²⁷ 「石田の年表」画像等権利関係は以下の通り：
[(*) : 著作権が第三者に帰属する著作物であり、利用にあたっては、この第三者より直接承諾を得る必要がある。
(CC) : 著作権が第三者に帰属する第三者の著作物であるが、クリエイティブ・コモンズのライセンスのもとで利用可。
(PD) : ハブリクトメインであり、著作権の制限なく利用できる」(URL アクセスはいずれも 20190131 12:00 JST)：
- 1 ライブニッツ肖像 (PD)
https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Gottfried_Wilhelm_Leibniz_Bernhard_Christoph_Francke.jpg
- 2 ロック肖像 (PD)
https://commons.wikimedia.org/wiki/File:John_Locke.jpg
- 3 ライブニッツ 計算機 (PD)
https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Leibniz_Stepped_Reckoner_mechanism.png
- 4 ライブニッツ 結合法 (PD)
https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Fotothek_df_tg_0005486_Mathematik_%5E_Kombinatorik.jpg
- 5 ニエップス写真 (PD)
https://commons.wikimedia.org/wiki/File:View_from_the_Window_at_Le_Gras_Joseph_Nicéphore_Niépce.jpg
- 6 リュミエール兄弟 「工場の出口」 (PD)
<https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Sortieusinelumiere.jpg>
- 7 ソシユール肖像 (PD)
https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Ferdinand_de_Saussure.jpg
- 8 パース肖像 (PD)
https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Charles_Sanders_Peirce.jpg
- 9 高柳健次郎 テレビ実験「イ」 (*)
- 10 米ラジオ民間放送 (PD)
https://en.wikipedia.org/wiki/Brox_Sisters#/media/File:BroxSistersRadioTeddyBear.jpg
- 11 ENIAC コンピュータ (PD)
<https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Eniac.jpg>
- 12 米テレビ放送開始 (PD)
<https://commons.wikimedia.org/wiki/File:OTVbelweder-front.jpg>
- 13 Macintosh 128K (CC)
https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Macintosh_128k_transparency.png
- 14 WorldWideWeb (PD)
https://commons.wikimedia.org/wiki/File:WorldWideWeb_FSF_GNU.png
- 15 第三次人工知能ブーム (CC)
<https://commons.wikimedia.org/wiki/File:ArtificialFictionBrain.png>
- ²⁸ カール＝オットー・アーペル『哲学の変換』磯江景孜訳、二玄社 東京 1986 p.68
Karl-Otto Apel *Towards a Transformation of Philosophy*. Routledge & Kegan Paul Boston 1980, p.80
- ²⁹ ダニエル・ブーニユー『コミュニケーション学講義——メディアオロジーから情報社会へ』、西兼志訳、書籍工房早山 東京、2010, p.60
- ³⁰ 石田英敬『大人のためのメディア論講義』ちくま新書 筑摩書房 東京 2016, p.129

- ³¹ この探究については、その成果を『一般記号学講義1 新しい〈記号の学〉』として東京大学出版会より刊行予定である。
- ³² Michel Foucault *Les mots et les choses* Gallimard Paris 1966, chap. IX « l'homme et ses doubles » 邦訳 ミシェル・フーコー『言葉と物』佐々木明・渡辺一民訳 新潮社 東京 1974, 第九章「人間とその分身」を参照。
- ³³ 石田英敬・東浩紀『新記号論 脳とメディアが出会うとき』ゲンロン 東京 2019、「補論」を参照。
- ³⁴ マックス・ホルクハイマー、テオドル・アドルノ『啓蒙の弁証法—哲学的断想』徳永恂訳 岩波文庫 岩波書店 東京 2007
- ³⁵ 石田英敬『大人のためのメディア論講義』前掲書 第三章「現代資本主義と文化産業」を参照。
- ³⁶ Jean Baudrillard *Pour une critique de l'économie politique du signe*, Paris Gallimard 1972; 邦訳 ジャン・ボードリヤール『消費社会の神話と構造』今村仁司 塚原史 訳 紀伊國屋書店 東京 普及版 1995
- ³⁷ Gilles Deleuze et Félix Guattari *Le capitalisme et la schizophrénie 1 : l'Anti-Œdipe Minuit Paris 1972; Le capitalisme et la schizophrénie 2 : Mille Plateaux*, Minuit Paris 1980; ジル・ドゥルーズ、フェリクス・ガタリ『アンチ・オイディプス 資本主義と分裂症』上/下 宇野邦一 訳 河出文庫 河出書房新社 東京 2006; 『千のプラトール 資本主義と分裂症』上/下 宇野邦一 訳 河出文庫 河出書房新社 東京 2010
- ³⁸ 私自身も東京大学に移るより前の1980年代後半のバブル期には同志社大学で「ポストモダンの思想」や「欲望論」を講じていた。
- ³⁹ Simon, H. A. (1971) "Designing Organizations for an Information-Rich World" in: Martin Greenberger, *Computers, Communication, and the Public Interest*, Baltimore, MD: The Johns Hopkins Press, pp. 40-41
- ⁴⁰ ジョナサン・クレリー『24/7—眠らない社会』、岡田温司監訳、石谷治寛訳、NTT 出版 東京 2015 を参照。
- ⁴¹ フロイト「自我とエス」『フロイト全集 18 1922-24 年 自我とエス みずから語る』岩波書店 東京 2007 所収。図13は邦訳p.20の図にフロイト原典の略号と「聴覚帽 (akust)」の原意「聴覚知覚」を石田が補って記入したものである。
- ⁴² フロイト『「不思議のメモ帳」についての覚え書き』同書 pp.317-323。図14では、フロイトの論文の指摘する「不思議のメモ帳」の構造を、『夢解釈』第7章「夢過程の心理学」で提示される第一局所論の「心の装置」の図式（『フロイト全集 5 1900 年 夢解釈Ⅱ』岩波書店 東京 2011）および「心理学草案」（『フロイト全集 3 1859-99 年 心理学草案 遮蔽想起』岩波書店 東京 2010）で示された神経学的知見を記入して重ね合わせることで、フロイトが理論化する心の装置と不思議メモ帳という心の補助具の対応関係を示している。この対応関係について、石田英敬「〈テクノロジーの文字〉と〈心の装置〉—フロイトへの回帰」石田英敬・東浩紀 前掲書 第二講義「フロイトへの回帰」（石田英敬、吉見俊哉、マイク・フェザーストーン 編集『デジタル・スタディーズ 2 メディア表象』東京大学出版会 東京 2015 第4章 pp.95-131）；及び、石田英敬・東浩紀 前掲書「第2講義 フロイトへの回帰」を参照されたい。
- ⁴³ これらの問題について詳しくは、石田英敬・東浩紀同書「第3講義 書き込みの体制 2000」を参照されたい。
- ⁴⁴ 「ラング（言語システム）」の中核は脳にあると考えていたソシュールの記号コミュニケーション観を説明した図。ソシュールによる「ことばの回路」（上記 図4）を複数化して、対話者相互の脳への記号の相互記入による、「集団脳」と「ラング」の成長として説明することができる（石田による作図）。
- ⁴⁵ ソシュールの「ことばの回路」（上記 図4）とフロイトの第二局所論（上記 図13）を組み合わせた図（石田による作図）。二つの図を組み合わせることによる、欲望や抑圧のコミュニケーションを説明することができる。
- ⁴⁶ 石田英敬・東浩紀 前掲書 第3講義を参照。
- ⁴⁷ 文科省科学研究費補助金 基盤研究 (B) 「テレビ・コンテンツ分析の情報記号論的研究とハイパーメディア型理論事典の作成」2005 年度～2007 年度 研究代表者 石田英敬 研究分担者 吉見俊哉 水越伸
文科省科学研究費補助金 基盤研究 (B) テレビ・コンテンツ分析の情報記号論的研究と批評プラットフォームの制作 2008 年度～2010 年度 研究代表者 石田英敬 研究分担者 吉見俊哉
文科省科学研究費補助金 基盤研究 (B) テレビ・コンテンツ分析の情報記号論的研究とハイパー・アーカイブの制作 2011 年度～2013 年度 研究代表者 石田英敬 研究分担者 吉見俊哉 西兼志
- ⁴⁸ 「テレビ分析の〈知恵の樹〉」（石田英敬、西兼志、高畑一路、阿部卓也、中路武士）、『東京大学大学院情報学環紀要』、No.70, 2006 年 1 月、pp.3-64; 「批評プラットフォーム〈クリティカル・プラトール〉」、石田英敬・西兼志・中路武士・谷島貫太 『情報学研究：東京大学大学院情報学環紀要』、No.79, 2010 年 11 月、pp.1-46 を参照。
- ⁴⁹ 石田英敬「新『人間知性新論』〈本〉の記号論とは何か」、『ハイブリッド・リーディング 新しい読書と文字学』日本記号学会編 新曜社 東京 2016、pp.82-101、を参照。
- ⁵⁰ 例えば次のシンポジウム基調講演：“Le malaise dans la communication”, 13-14 February 2002 Komaba Le colloque international « Colloque franco-japonais autour de la Médilogie » ;with Régis Debray, Daniel Bounou, Monique Sicard,

Louise Merzeau, Karine Douplitzky, Jean Marc de Biasi, Nishigaki Toru, Watanabe Moriaki, Yoshimi Shunya, Hara Hiroyuki, Ito Mamoru

- ⁵¹ 石田による訳、『フロイト全集 第二〇巻 一九二九 - 三二年——ある錯覚の未来 文化の中の居心地悪さ』高田珠樹監修 岩波書店 東京 2011, p.100 に対応。「補助具をつけた神」と訳した原語 Prothesengott (邦訳は「人工義神」と訳) について、邦訳は「義足や義歯などのように、欠損した身体器官を補う人工補装具を意味する Prothese と神を意味する Gott からなる複合語」と解説している(編注(44) 同書 p.302)。
- ⁵² “ITU releases 2018 global and regional ICT estimates For the first time, more than half of the world’s population is using the Internet “(<https://www.itu.int/en/mediacentre/Pages/2018-PR40.aspx> : 2019/01 /31 18:00 JST アクセス)。
- ⁵³ デリダヤスティグレルが言うように、メディアという補助具が示しているのはプラトンの『バイドロス』に語られた「ファルマコン」問題なのである。プラトン『バイドロス』藤沢令夫訳『プラトン全集 5 饗宴 バイドロス』岩波書店 東京 1974 参照。
- ⁵⁴ Friedrich Nietzsche *Also sprach Zarathustra* Bd.4 „Unter Töchtern der Wüste“; 『ツアラトゥストラはかく語りき』第四部 「砂漠の娘たちのもとで」 石田による訳
- ⁵⁵ Paul Valéry « La liberté de l’esprit » in *Regards sur le monde actuel* Librairie Stock, Paris, 1931, p.178 ;邦訳 ポール・ヴァレリー 「精神の自由」、『精神の危機』恒川邦夫訳 岩波文庫 2012 所収
- ⁵⁶ Paul Valéry « La crise de l’esprit » Paul Valéry *Œuvres*, tome 1, Ed : Pléiade, 1957, pp. 988-1014 邦訳 同書所収
- ⁵⁷ 石田英敬「詩の言語と数の言語 ～『社会のポイエーシス講義』への補論 ～」前掲を参照。
- ⁵⁸ マラルメの詩の言語とエントロピーとの関係については、サイバネティクスを援用して論じたヘーゲル学者イボリットの次の卓抜な論を参照: Jean Hyppolite « Le ‘Coup de dés’ de Stéphane Mallarmé et le message » in *Figures de la pensée philosophique* II éd. P.U.F. 1971。マラルメと偶然の問題については、最近のものとしては次の研究が秀逸である: Quentin Meillassoux *Le Nombre et la sirène : un déchiffrement du ‘Coup de dés’ de Mallarmé*, Paris Fayard 2011
- ⁵⁹ リベット実験とリベット自身の論考については、ベンジャミン・リベット『マインド・タイム 脳と意識の時間』下條信輔訳、岩波書店、2005。問題の整理として、近藤智彦「脳神経科学からの自由意志論」(信原幸弘・原朔編『脳神経倫理学の展望』勁草書房、2008、第九章)が役に立つ。ここでの整理は、この論文に負っている。
- ⁶⁰ 「思考の幹 fluctuat nec mergitur」『東京大学大学院情報学環紀要』、No.72, 2007 年 7 月, pp. iii-v; 「思考の環 Polymetis, Polytropos, Polymechanos: 知のオデュッセイアのために」『東京大学大学院情報学環紀要』、No.93, 2017 年 10 月, pp. i-iv



石田 英敬 (いしだ・ひでたか)

[生年月] 1953 年 10 月

[出身大学または最終学歴] バリ第十大学大学院 人文科学博士

[専攻領域] 記号論 メディア論

[主たる著書・論文]

『記号の知／メディアの知－日常生活批判のためのレッスン』(東京大学出版会、2003)

『大人のためのメディア論講義』(ちくま新書、2016)

『新記号論－脳とメディアが会おうとき』(東浩紀との共著)(ゲンロン、2019)、他 多数

[所属] 大学院情報学環(大学院総合文化研究科 兼任)

[所属学会] 日本記号学会、日本マスコミュニケーション学会

A Course in Information Semiotics: Synthesis and Perspective

Hidetaka Ishida*

I have taught the course in “Information Semiotics” since the Graduate School of Interdisciplinary Information Studies at the University of Tokyo was founded in 2000. This article is a review of nineteen-years of teaching and research in the chair “Information and Man” which I held until March 2019.

I situated information semiotics at the interface of human sciences and informatics, formulating its problematic as follows: “While people participate in semiosis, machines participate in information processing”. The origin of this epistemological interface can be illustrated by comparing Saussure’s “speech circuit (le circuit de la parole)” with Claude Shannon’s communication schema.

I inscribe information semiotics in a broader perspective for a semiotics of media. The media are part of the fundamental structure of the human being articulating three dimensions of civilization: *technique* (the hand), *cognition* (the brain) and the *social* (the face). The media involve writing (*écriture*) in the sense of grammatology and grammatization. With the end of the Gutenberg era, there has been a generalization of *technological writing* with *graph technology* and *tele-technology* in the 20th century. After the revolutions of the analogue and digital media, the semiotics of media studies the “life of signs in society (la vie de signes dans la société)” (Saussure) mediated by analogue and digital writing.

The axes of teaching and research of information semiotics consist in:

- (1) An epistemology of information semiotics
- (2) An analysis of the “life of signs” in the media society: criticism of the industrialization of consciousness and analysis of modern capitalism.
- (3) A methodology of criticism through the use of cognitive technologies.

* Professor, the Graduate School of Interdisciplinary Information Studies and the Graduate School of Arts and Sciences, the University of Tokyo

Key Words : Semiotics, Media Studies, Information Semiotics, Grammatology

Information semiotics addresses a problematic of civilizational and cultural therapeutics. Contemporary man lives his life on the basis of the technological unconscious, equipped with communication artifacts and in permanent connection with information networks: hence the *malaise of civilization of the prosthetic man*. Information semiotics is this prosthetic man's science for life, the knowledge of his consciousness and unconscious. The most crucial matter at stake is the autonomy and freedom of the prosthetic man who cannot *not* communicate through information and signs.